

2) 海洋文化資料の管理保存に関する調査

木下 靖子¹・板井 英伸²

キーワード：海洋文化、海洋文化館、資料管理保存技術、資料調査、データベース

1. はじめに

本事業では、海洋文化館の展示・収蔵資料の保存管理方法、修復方法を確立するために、館内環境（温度、湿度、冷却装置・サーキュレーター等の機器の使用）について記録を取り、資料の状態調査を行った。また、海洋文化館の展示・収蔵資料に関する学術的調査を実施した。

2. 海洋文化資料の管理保存に関する調査

1) 温湿度観測データの分析

館内・収蔵庫内の温湿度観測データを集積し分析を行った（図-1）。分析結果からカビ・害虫の発生、資料劣化を予測する要注意水準（温度 27℃以上、湿度 75%以上）、危険水準（温度：28℃以上、湿度：85%以上）を設定し、事前に巡視を行う対策をした。また、これまでの分析により、同日内昼夜間の温湿度の変動差が各 10℃、10%以上の状態が続くと 1～2 週間後にカビの発生が起きやすいことがわかり、温湿度データの推移を確認し事前巡視の対策を行った。

館内・収蔵庫内の温湿度観測データとカビ発生記録により、館内冷氣導入開始時期の検討、展示資料別に小型のサーキュレーターの設置、乾燥剤の設置を実施した。

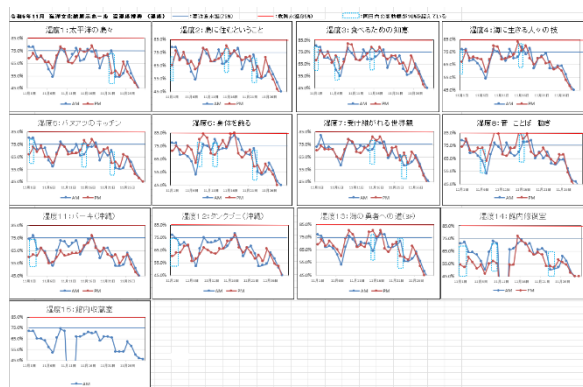


図-1 館内の温湿度推移管理データの一部
昼夜間で大きな差が生じる日をマーク（水色点線囲み）し、巡視強化の目安にした。

2) カビ・害虫発生への対処

6月22日、首里城御材木からカミキリムシの発生、6月29日、展示資料カビ発生、7月15日、木造船大

型カヌー・ラカトイの装飾の劣化確認、7月24日、展示資料カビ発生とヒメダルマゴキブリ死骸確認、8月20日、展示資料木製深鉢にカビ発生、8月21日、木製資料にカビ発生、9月1日、大型木製カヌー（クラカヌー、ラカトイ）の船体、アウトリガーにカビ発生が確認された。

害虫については発生場所がわかる場合はその資料の隔離を行い、死骸については種類の同定を行い記録した。カビについては軽微なものは不織布にて拭き取り、菌糸の拡大が見られるものについては不織布に 70%エタノール水溶液を浸潤させ拭き取りを行った（写真-1）。



写真-1 ラカトイに発生したカビの拭き取り作業

3. 海洋文化資料に関する調査

12月17～18日、海洋文化館にて、後藤明氏（南山大学）、小野林太郎氏（国立民族学博物館）、宮原千波氏（総合研究大学院大学学生）、山極海嗣氏（琉球大学）による、展示大型木造船（クラカヌー、ラカトイ、レパ船）と小型カヌー（ソロモン、パプアニューギニアのアウトリガーカヌー）の熟覧、3D測量に同行（写真-2）。実施した 3D 測量は考古遺跡調査における簡易的な測量の技術を転用したもので、これにより専用アプリを用いて大型展示資料の 3D 測量を行う技術を得ることができた（写真-3）。



写真-2 国立民族学博物館のクラカヌーの權



写真-3 海洋文化館のクラカヌーの 3D 測量

博物館施設における資料管理方法の知見を得るため、類似施設を訪問し、展示室、保管庫の熟覧を行った。12月1日、国立民族学博物館の大型木造船収蔵庫を熟覧し、資料の保存、修復に関する技術について担当者から話を聞いた（写真-4）。展示数約12,000点、収蔵資料数約25万点に及ぶ資料の個別の記録カードの一部を実際に見学してもらい、保管資料の情報管理について知ることができた。



写真-4 国立民族学博物館の木造船専用収蔵庫

2月2～3日、海洋文化館の映像資料作成を担当した（有）海工房を訪問し、展示資料、映像資料収集時の2013年現地調査（パプアニューギニア、ソロモン諸島、ミクロネシア連邦ポロワット島）についてカヌー建造完成までの現地での交渉の様子について情報収集を行った（写真-5）。12月4日、園田学園大学（兵庫県）所蔵のサタワル島の大型航海カヌーを熟覧し、資料の保存、修復に関する技術、大学における教育利用について、同大教学支援部国際交流

センター課長、安川雅信氏に聞き取りを行った（写真-6）。（以上、実施にかかる旅費については、海域アジア・オセアニア研究プロジェクト（MAPS）研究プロジェクト研究会参加（招致）により行った。）



写真-5 海工房クラカヌー撮影調査の資料（葉の貨幣）



写真-6 園田学園大学所蔵の航海用木造船カヌー

4. 外部評価委員会コメント

海洋文化館のカヌー資料も年数がたって保存における種々の問題が起こっており、随時それらに対応していることがうかがえる。また現在、開館50周年記念特別展が開催されている国立民族学博物館との連携がいろいろな形で模索され、さらに園田学園資料の調査などを行っており、海洋文化館を国内の研究機関と連携させるため、今後に向けた良好なスタートを切ったと判断される。今後も共同のワークショップなどを積極的に展開し、移動展や資料の相互利用などがやりやすくなるように模索していただきたい。

（後藤顧問：南山大学人類学研究所特任研究員）

海洋文化館の展示・収蔵資料の温湿、カビ・虫害対策を講じて資料を保全管理していることは評価できる。また、国立民族学博物館での船収蔵庫の熟覧と展示・所蔵資料の個々の記録カードの調査が、海洋文化館資料の保存・修復の手法・技術として活用するうえで多くの知見を得たとのことは注目される。さらに、海洋文化館展示中のカヌー建造や映像資料作成を担当した（有）海工房を訪問して行った、現地での建造過程や搬送状況などの情報収集の調査は、海洋文化館収蔵資料のデータを拡充するうえで有効である。今後も海洋文化館と同類の資料を

展示・収蔵する施設における情報収集活動は不可欠である。

なお、園田学園所蔵のカヌーはサタウル島ではなくヤップ島の建造で日本に航海してきたものである。

(須藤顧問：堺市立博物館館長)